

派遣留学生帰国報告書

* 帰国(復学)後の情報を入力してください

記入日	2018/8/29
所属学部	千葉大学大学院人文社会科学研究所
所属学科・専攻	公共研究専攻

1. 留学先について

留学先大学名	私立成均館大学校(大韓民国・ソウル特別市)											
留学先所属学部等	一般大学院文科大学史学科											
留学期間	出発日	2017/7/27	入学日	2017/8/28	修了日	2018/6/21	帰国日	2018/7/1				
住居	<input checked="" type="checkbox"/> 大学(紹介)の寮・アパート	<input type="checkbox"/> 民間アパート		その他()								
	通学時間	10分					On campus					
	通学方法	徒歩										
	居室スペース	個室	<input checked="" type="checkbox"/>	(2)	人部屋	その他()						
	共有スペース	完全個室	<input checked="" type="checkbox"/>	キッチン	<input checked="" type="checkbox"/>	トイレ	<input checked="" type="checkbox"/>	バス	<input checked="" type="checkbox"/>	リビング	その他()	
食事	自炊	10	%	学食	40	%	外食	50	%	その他	()	%
保険	海外旅行保険(名称)	損害保険ジャパン日本興亜株式会社 OSSMA会員専用海外留学保険										
	派遣先大学指定の保険(名称)							<input type="checkbox"/> 強制加入				
	その他											
渡航ルート	ex.) 成田⇄シカゴ(飛行機)⇄ウィスコンシン(電車)											
	成田	⇄	ソウル仁川(飛行機)	⇄	地下鉄4号線恵化駅(電車)							

3. 学業面

履修科目名	種類 ^{ex.正規、聴講}	単位数	単位互換認定申請の有無		
1 近代韓国政治史	正規	3	有	✓	無
2 上級韓国語	正規	6	有	✓	無
3 韓国近代史特講	正規	3	有	✓	無
4 朝鮮時代史演習	正規	3	有	✓	無
5			有		無
6			有		無
7			有		無
8			有		無
9			有		無
10			有		無

3-1. 授業科目の選択、登録方法

〈授業科目の選択〉秋学期は大学院の専門授業と交換留学生を対象とする韓国語の授業を選択した。大学院の授業は自分の研究に直結するものであり、事前に教官に連絡したため、迷うことなく選択できた。また、交換留学生対象の韓国語授業は、週1回・週2回・週5回の計3コースの内から選択でき（受講は必須ではない）、専門授業を受講することから、時間的に余裕がある週2回のコースを選択した。春学期は、語学授業を受講せず、大学院の専門授業を2つ選択した。

〈登録方法〉授業登録は学期が始まる1ヶ月ほど前（8月上旬～）から大学の開設したインターネットサイトで行った。登録は学期が始まる前までに行わなければいけないので、常に大学からの連絡をチェックして締切に間に合うよう行動した。また、登録は先着順のようなので、人気の授業はすぐに定員一杯となって登録ができなくなるとの話も聞いた。授業科目や登録に関する情報は大学から英語版で送られてきたが、説明がかなり簡略化されており、後で韓国語版の説明を読んで翻訳されていない情報を追加で得た。例えば、英語版のサイト上で科目検索をすると科目名と授業時間など基本的な概要しか出てこず、科目の詳しい内容などは出てこなかった。韓国語が多少わかるのであれば、留学生に送付される英語版だけではなく、韓国語版もぜひ目を通しておいた方がよい。交換留学生の多くが韓国語の語学授業と英語のみを使用する専門授業を受講していたせいも、韓国語で受講する教養・専門授業に関する説明は少なかった印象だった。

3-2. 授業内容、方法に関して

大学院の専門授業はゼミ形式であり、毎回の講読文献と発表担当者を予め決めた上で、議論を中心に行われた。内容は非常に高度かつ専門的であり、事前に知識がないと受講は相当難しいと思われる。毎週に講読しなければならない文献の分量も相当多く、受講開始当初は戸惑う事が多かった。毎学期ごとに最低1回は発表するように心がけたが、周囲の大学院生や教官の助けを借りつつ韓国語で発表を行うことができたのは、大変貴重で有意義な経験であった。専門授業を受けるためには、教官や周囲の韓国人学生との密なコミュニケーションが必要不可欠だと感じられた。語学授業は3時間ずつ週2回受講した（週6時間）。最初にクラス分けのテストを行い、その結果に従って初級・中級・上級のクラスに配属された。ただし、自分の希望次第でクラス変更は可能であり、授業開始当初は受講生のクラス移動が頻繁にあった。基本的には会話、リスニング、文法などをバランスよく学ぶスタイルであり、韓国人の教官が韓国語で授業を進めた。受講生同士でのグループワークも多く、他の交換留学生と仲良くなる絶好の機会となった。中間・学期末にはテストがあり、今まで習った文法事項やテーマに沿った自由作文の課題などが課せられた。

3-3. 語学力について

留学前から韓国語学習を継続して行っており、留学時点で中級レベルの韓国語読解能力を有していたと思われる。留学前に韓国語能力試験(TOPIK)の4級に合格(2016年10月)しており、簡単な内容であれば韓国語で会話できると考えていた。しかし、現地で留学生生活を始めて実際に韓国語で会話すると、最初は簡単な会話でも返答に窮することがあり、「生きた」韓国語で会話することの難しさを痛感した。最初の学期では韓国語の授業を受講しつつ、並行して大学院の専門授業に出席していたが、特に大学院の授業では教官や他の学生の議論が十分に理解できず、自身の語学力の拙さを思い知る日々だった。このように、当初は会話に困難な場面が多かったが、場面ごとに多用されるフレーズや言い回しを次第に覚え、周囲の韓国人学生の親切なアドバイスもあり、語学力の着実な上達を果たすことができた。語学授業で学んだことも役には立ったが、それ以上に、日常的に大学院の韓国人学生と話したり食事を伴にすることが語学力向上の大きな助けとなった。生活に慣れた後は、個人的に韓国人学生と「言語交換」(互いの言語を教え合う)をしたり、積極的に色々な人に会うことで、最終的に専門授業の内容も十分に理解できるレベルにまで上達できたと自負している。

3-4. 図書館など学内施設について

私はソウルの地下鉄4号線恵化駅近くにある成均館大学校人文社会科学キャンパスで留学生生活を送った。キャンパス構内各所には誰でも使用可能なパソコンと印刷機が設置されており、すぐにインターネットにアクセスできた。また、構内では教職員や学生が使用できるWi-Fiが常に作動しており、スマートフォンを使って講義資料をダウンロードすることなども一般的に行われていた。図書館は韓国語の書籍のみならず、日本語や外国語の書籍も数多く所蔵しており、私の研究分野である歴史研究に関連する書籍を簡単に貸し出すことができた。図書館内にはその他にもセミナー室や自習スペースなどがあり、カフェとコンビニエンスストアも併設されているので一日中勉強できる環境が整っていた。構内には食堂が4つほどあり、日替わりメニューが学内向けサイトで確認できる。8時ごろまで営業している食堂もあるので、外食が中心だった私にとっては非常に利用しやすかった。構内には複数のカフェが営業しており、勉強や待ち合わせなどに頻繁に利用されていた。そもそもソウルの町中至る所にカフェがあるが、大学でも講義や勉強の息抜きにカフェに行く人が非常に多かった。その他に、大学構内にはコンビニエンスストアや書店、美容室、ジムなどがあり、留学生も問題なく利用できた。

3-5. その他

私は大学院人文大学(学科)史学科に所属したため、史学科の共同研究室で自習する機会が多かった。共同研究室に行けば韓国人大学院生の友人たちと日常的に会うことができ、研究の合間に雑談して交流を深めることができた。留学当初は史学科共同研究室の存在を知らなかったが、人づてに知り合った史学科の大学院生に部屋の位置や利用法などを教えてもらい、結果的には共同研究室に集う史学科の学生たちと多く知り合うことができた。図書館で自習することもあったが、やはり同じ分野や専攻を志す学生たちと日々一緒に勉強することは自分の留学生活にとって本当に貴重で楽しい経験となった。今から思い返せば、留学を始めてからすぐに史学科の大学院生数人と知り合うことができたのは非常に幸運なことだった。語学授業や留学生向けのイベントなどで他国の留学生とは自然と知り合うことができるが、自分から積極的に行動しないと韓国人学生と知り合う機会は意外と少ないと感じている。学内のサークル活動や知人からの紹介などを活用して、韓国人学生となるべく多く知り合うことは、語学能力の向上のみならず、留学生活すべての面で有意義であり、特に専攻分野を明確に決めている留学生は同じ専攻分野の学生と知り合うことが非常に重要であると実感した。

<学外での研究活動>成均館大学校での指導教員から学外の研究会(高麗大学校で開催)を紹介してもらい、定期的に出席していた。学外の大学院生・研究者とも知り合うことができ、研究に関する有益な情報を多く入手することができた。知り合った大学院生や研究者のほとんど皆が、留学生である私を親身にサポートしてくれたため、自分の専門分野に関する見識をより深めることができた。大学の授業だけではなく、学外の学生とも知り合うことで人脈がより広がり、それだけ研究に関する有意義な情報や知識を得る機会も増えたと感じている。

4. 生活面

4-1. 住居について

留学した1年間は大学の寮に継続的(学期・休業期間ごとに申し込みが必要)に居住していた。学期や休業期間前に入寮申請を行って寮費を払い、学期開始直前の週末に大学側が指定した寮(成均館大学校ソウルキャンパスには大学近辺に複数の寮がある)に入居した。私が入居した寮は大学正門から5分程の場所にあり、通学には大変便利な場所にあった。寮1室の中は、6人共同の勉強机やキッチン、トイレ・シャワー室、洗濯室、3つの小部屋に分かれており、小部屋は2段ベッドと2つのクローゼットがある2人部屋だった。2人×3部屋の合わせて6人で共同生活を行ったが、学期や休業期間ごとにルームメイトが入れ替わり、コミュニケーションを取るのが非常に大変だった。寮には洗濯機や冷蔵庫、電子レンジ、電子ポット、ウォーターサーバー、クーラーと床暖房が備え付けてあるが、その他の生活用品・消耗品はすべて自分で調達した。キッチンはガスを使わない電気コンロであり、入寮当初は火力が低くて調理に相当時間がかかり、非常に困ったことを覚えている。入寮・退寮者がいれば寮の清掃員が部屋の清掃を簡単に行ってくれるが、それ以外は日常的に入寮者が清掃・ゴミ出し(寮の玄関脇にゴミ分別・廃棄場所)を行う。ゴミ出しや共有スペースの清掃については、ルームメイトとの積極的な話し合いが必須であり、清掃やゴミ出しを怠れば、寮の管理人によって定期的に行われる部屋のチェックで指摘された。寮の生活は基本的に共同生活であり、自分の生活スタイルとルームメイトのそれを上手にすり合わせていくことが求められた。私が一緒に暮らしたルームメイトはほとんどすべてが留学生であり、日常的に英語でコミュニケーションを取る必要があった。生活習慣や個々人の生活スタイルの違いから生じる摩擦やストレスも数多く経験したが、結果的には、寮で暮らしたことを契機に自分の生活スタイルや習慣を意識的に見直すことができたと思う。

4-2. 食生活について

留学中は外食中心の食事だった。朝食はシリアルやキンパブ(海苔巻き)を食べ、昼食と夕食は学食や寮近辺で食べるが多かった。留学開始当初などは特に精神的・時間的余裕がなく、結局自炊はあまりしなかった。韓国の食堂ではキムチだけでなく様々なおかず・惣菜(パンチャン)が食べられたため、それほど栄養的に偏らず食べれると思う。また、特に学食や大学近辺の食堂は値段が安い割に量は多く、日本と比較して外食はそれほど経済的負担にはならないのではないかと感じた。韓国では二人以上の複数人で外食することが一般的だと留学前から聞いていたため、留学直後は食堂に一人で入ることを遠慮していたが、すぐに一人で外食することにも慣れて色々な食堂に行くことができるようになった。また、留学生活が進むにつれて韓国人の院生や友人たち、教員・研究者たちと食事する機会が徐々に増え、さらに多様で美味しい料理を味わうことができるようになった。韓国料理については、全般的に辛い料理が多かったが、辛くない料理も数多く、個人的に特段の苦手意識は持たなかった。韓国人の中にも辛い料理(例えばキムチ)が苦手な人はいるとの話を聞き、不思議と納得したことを鮮明に覚えている。このような興味深い話を色々聞くことができるため、学生や教員との食事会には積極的に参加した。一緒に食事をしながら様々な話を聞くことで、語学の上達につながるのみならず、地域の食文化や名物の知識など、韓国社会の奥深さの一端に触れることができた。一緒に食事をしたことは、周囲の韓国人学生たちと親密な関係を築く上で大きな一歩になったと実感している。さらに、韓国人学生たちと一緒に酒宴の席を囲んだことが個人的には一番印象に残っている。韓国の飲酒文化を体験しつつ、胸襟を開いて率直に話げできたことで、少しずつ韓国社会に馴染んでいくことができた。

4-3. インターネット環境、携帯電話について

先述したように、学内や寮には常時Wi-Fiが稼働しており、インターネットには即座に接続できる環境が整っていた。街中でも地下鉄駅内では公共Wi-Fiが利用でき、ショッピングモールなど大型施設でも必ず無料で利用できるWi-Fiが設置されていた。街中の至る所にあるカフェもWi-Fiが利用でき、日本よりもWi-Fiを手軽に利用できた。携帯電話については、日本で使用していたスマートフォン(SIMロック解除済)をそのまま持っていき、韓国で購入したプリペイドのSIMカードを挿入して使用していた。面倒な契約手続きが必要なく、使う分だけチャージすれば良いので、留学当初は便利であったが、次第に学生間の連絡(カカオトーク:韓国のメッセンジャーアプリ)や地図アプリを利用する機会が増えたため、想定以上にデータを消費してしまうことになった。留學生活では韓国の携帯番号が必要になる機会(本人確認やウェブ登録など)が多く、韓国のアプリ(カカオトークや地図アプリ)も大変便利なため、留学前から韓国での携帯電話の利用についてある程度準備した方が良いと思われる。

4-4. 服装について

2018年のソウルは例年以上に寒さが厳しく、特に年明けから2月にかけては氷点下10度を下回る日々が続いた。そのため、日本から持って来たコートなどの防寒具では寒さを防ぎきれないことが多かった。韓国で改めてダウンジャケットや手袋などの防寒具を追加購入しても良かったかもしれない。千葉と比べて、ソウルの冬は遥かに寒さが厳しく、雪が降る日もある。通った大学は坂が多かったため、路面の凍結に非常に注意しなければならなかった。冬に履く靴にも注意を払って準備する必要がある。冬季以外の季節に関しては、日本と同じ服装で基本的に問題なかった。梅雨の時期や夏は雨も多く降り蒸し暑いいため、なるべくラフな服装(Tシャツとサンダル)で生活するように心がけた。

4-5. 健康管理について

ソウルでの生活では、冬の1月と春の3月に一時的に体調を崩してしまった。冬は寒さが想像以上に厳しく、1月のある日に体の悪寒と頭痛を感じた。日本から持参した風邪薬を飲用して安静にし、2日ほどで体調は回復したが、それ以降はマフラー・手袋・帽子をしっかり装備して外出するなど、防寒を強く意識した。また春のソウルでは大気汚染(PM2.5:韓国語で「미세먼지(微細粒子)」)がひどく、特に今年のソウルでは空が霞んで見えるほど汚染物資の影響が深刻であり、度々PM2.5警報が発令され、街中や大学でもマスクを着用する人が多かった。私も3月中旬に喉が非常に痛み、病院で診察を受けた結果、アレルギー性鼻炎だと診断された。これ以降は処方された飲み薬を服用しつつ、マスクをなるべく着用して外出するように心がけた。上記の時期には外出時に注意を払ったが、それ以外は健康に特段問題なく過ごすことができた。提供される食事や飲料水については、夏季に生ものに少し注意を払ったが、その他は特段強く意識しなかった。ただし、食事会や宴会で飲酒する機会が多かったため、飲みすぎと肝臓の負担になるべく気を付けるように努力はした。千葉での生活とは異なり、徒歩で移動する機会が多く、結果的に体重も少し減少したのは予想外の驚きだった。

4-6. 保険、OSSMAの利用について

留学中は常に保険加入証明書を持ち歩き、緊急の場合にはすぐに保険会社と連絡を取れるようにしていた。OSSMAから、出発日には現地に到着したことの確認メール、留学中には2週に1回ずつ安否確認メールが送られてきた。安否確認は簡単な手続きだったが、連絡を怠ると消息不明と判断されてしまうため、安否確認メールを確認したらすぐに返信するように気を付けた。先述したように、3月に喉が痛くなり病院で受診することにした。その際、ソウル市内で日本語で受診できる病院を探すため、OSSMAのヘルプデスクに連絡した。OSSMAのヘルプデスクは症状の確認、加入保険の確認、近隣の病院(日本語対応)の検索、受診予約まで代行してくれたため、私は当日に病院に行くだけで済んだ。韓国の病院で診察を受けたのは初めてだったが、OSSMAの現地職員・ヘルプデスクからのサポートが非常に丁寧であり、全く負担を感じなかった。留学保険やOSSMAの存在を強く意識する機会は日常的に少なかったが、緊急の時には援助してもらえる存在として非常に心強く感じていた。

4-7. 課外活動について

大学では、主に自身が所属した史学科関係の行事に参加する機会が多かった。成均館大学校史学科が主催するシンポジウムや研究会に関しては、知り合った史学科の大学院生たちが色々な形で私に連絡してくれたおかげで数多く参加することができた。自身の研究にとっても、学内・学外の多くの研究者と知り合うことができ、大変有益で貴重な機会となった。周囲の大学院生たちからは、その他にも、史学科の学生たちが企画した調査旅行や日帰りの史跡見学会(韓国語で「踏査(タップサ)」)に色々誘ってもらった。研究書籍や論文を読んで知識を得るだけでなく、実際に史跡を訪れて解説を聴いたり自分の目で眺めたりすることで、さらに研究対象や時代について興味関心を抱くことになった。また、同行する学生たちと様々な会話をする中でより親密に関係を築くことができ、留学生活の中で忘れがたい経験の一つとなった。史学科の学生との交流以外には、留学生同士の交流もあった。学期ごとに交換留學生が6、7人ずつのグループに分かれ、グループごとにチューターとして韓国人学生1人が参加した。韓国での留学生生活をより楽しんでもらうため、主に韓国人学生が主導してグループごとに様々な交流企画を行っていた。例えば、グループでの食事会や休日のソウル観光などを各グループごとに企画したり、複数のグループ合同で留学生パーティーを開催していた。私も何度か企画に参加したが、様々な地域から来た留学生と交流する絶好の機会となった。成均館大学校では、大学職員と留学生との交流プログラムもあり、私もこのプログラムに参加して成均館大学校入試課の職員たちと何度か食事をする機会を得た。こうした場で大学事務や韓国の大学入試制度についての様々な話を聞いたことが強く印象に残っている。

4-8. 学外のコミュニティとの交流について

成均館大学校大学院史学科での交流とは別に、学外の研究会・勉強会で研究活動を行った。韓国の教官から紹介を受けて、他大学で開催される月1回の勉強会に参加したが、人脈と学識を広げる上で大変有意義な機会となった。その他には、ソウルに留学中の日本人学生(大学院生)と定期的に交流して、それぞれの留学生活の悩みなどを共有した。久しぶりに日本語を話すことで、ストレス解消にもなり、帰国後にも継続的に助力を受けることができる人脈を構築できた。

4-9. 日本から持参してよかったもの

〈市販薬〉留学生活の中で一時的に体調を崩した時もあったが、その際に日本から持参した風邪薬を服用し、結果的には短期間で体調を回復させることができたと思っている。OSSMAヘルプデスクの助力があったが、外国の病院で受診することは想像以上に不安な気持ちに陥り、ストレス要因にもなった。もちろん、体調不良が深刻な場合は病院で受診する必要があるが、そうではない軽い風邪や体調不良の場合、むやみに病院に頼らず、まずは自力で対処できるように準備しておくことが必要だと痛感した。日本から薬を持参する場合、様々な症状を想定しつつ、多種類の市販薬を持参すると良いと思う。

〈旅行用品〉留学中に現地を旅行する機会も何度かあったが、その際には日本から持参した旅行用品(旅行用の歯磨きセット/シャンプーセット/洗剤の小袋など)が非常に役に立った。旅行用品はいざという時(災害時など)の備えにもなるので、なるべく節約しつつ大切に使った。

4-10. 日本から持参したが不要だったもの

持参して不要だったものは特に記憶にない。消耗品は勿論、日用品も基本的には現地で安く調達することを優先したため、なるべく日本からは持参する物品を少なくした。実際、ソウルの日本資本のコンビニエンスストアやダイソーなどの商店では身の回りの雑貨品を購入できるので、特にこだわりがなければ現地で買い揃えても良いと思う。

4-11. 現地での対人関係について気づいたこと(習慣の違い、マナーなど)

留学中に強く意識したのは、やはり人間関係であった。特に、韓国の上下関係は日本とは異なる部分も多く、新鮮に感じると同時に、どのようにふるまえば良いのかをその時々で色々考えた。周囲の韓国人たちは、私が外国人留学生であることを知っているのだから、厳しく注意するようなことはなかった。それでも、韓国独特の礼儀作法は早めに身に付けようと努力した。目上の人に対しては、必ず尊敬語(尊待語)を使って会話をし、同席する食事や酒宴の場でも独特の作法が存在する。例えば、食事に最初に手をつけるのは目上の方が先のものであり、乾杯の時にも顔を背けて飲むなどの作法は、韓国人学生が行っている姿を真似して身につけていった。さらに、先輩や後輩、同期との会話の仕方、留学当初は色々悩んだ。どのように名前を呼べば良いのか(愛称・肩書など)、パンマル(友達同士の話し方-タメ口)をいつ誰に使うのか、時と場合によっては判断が難しかった。幸運にも、私は周囲の人間関係に恵まれたので、こうした話し方の不安や上下関係の悩みを率直に尋ねることができる人々が周囲に多く、次第に悩まずに会話ができるようになった。街中でも、例えば電車の中で高齢の方にすぐに席をゆずるなど(最近は韓国の若い人もできてないとの嘆きを聞いたが)、自分より年齢が高い方に対する礼儀が求められることが多かった。ただし、一般的に韓国は日本よりも目上の人に対する礼儀作法が厳格だと言われるが、実際に留学してみると、大学の教官たちと学生たちとの関係は想像よりも親しげであり(個人差あり)、個々人の関係性によって上下関係の厳格さも様々であった。日本でも同じであるが、上下関係の理解や目上の人への敬意・礼儀作法をすぐに身に付けることは難しいので、日本でも最低限のマナーや礼儀とされることをしっかりやれば良いと思う。それよりも大事なことは、やはり相手との基本的なコミュニケーションであり、相手の話をしっかり聞き、場の雰囲気や周囲の行動をよく観察しながら、自分からも積極的に実践してみるの何よりも大事だと考えている。あまり、委縮せず、習慣やマナーの違いを楽しむことが重要だろう。

4-12. 余暇の過ごし方

旅行

【慶尚北道安東(学会参加&踏査)】2017年8月(4日間)、約2万円

【仁川広域市(踏査)】2018年2月(日帰り)、約1万円

【慶尚南道金海など(踏査)】2018年3月(3日間)、約2万円

【京畿道驪州(踏査)】2018年4月(日帰り)、約5千円

その他 * 気分転換やストレス発散法など。

気分転換として、親しい大学院の学生たちと大学周辺の店でよく飲んだ。韓国の店で、お酒を飲みながら様々なことを会話することが何より楽しく、留学の悩みや不安も解消することができた。また、日中の空き時間に大学構内・周辺のカフェに行き、ゆっくりと落ち着いて過ごした。日々常に韓国語で会話する環境で暮らしていたため、日本人留学生同士で月に1度は集まり、日本語を思う存分に話すことでストレスを解消した。日本の食事が恋しくなった時には、大学近くの日本食が食べられる店に行ったり、日本の食材を売っている専門店で食材を買って寮で食べたりした。割高ではあるが、ソウルでは比較的簡単に日本式の食事や食材に触れることができたので、気分転換に活用した。ソウルの冬は寒く、外に出るのが億劫になるので、意識的に外に出る機会を設けた。なるべく様々な人に会う機会を設けて、積極的に交流をすることで、結果的にストレスを減らすことにもなった。

5. その他

5-1. 留学先大学について

韓国ソウルの成均館大学校はかつての高麗・朝鮮時代の儒教教育機関である成均館を名前に冠するように、特色ある私立大学である。近年は東アジア研究にも力を注ぎ、東アジア学術院などの大学内研究機関で韓国・中国・日本に関する人文社会科学研究が行われている。また、「グローバル大学」を目指して、盛んに海外から留学生を受け入れ、経済・経営分野でも英語中心の受講プログラムなどを豊富に用意している。成均館大学校の語学堂(成均語学院)では外国人留学生が韓国語を体系的に学習できるような授業が行われており、数多くの留学生が学んでいる。ソウル特別市の地下鉄駅4号線恵化駅周辺に位置する人文社会キャンパスとは別に、水原市には成均館大学校自然科学キャンパスがあり、文理系の幅広い専門科目を学べる総合大学である。人文社会キャンパスが位置する大学路は、劇場が集まり、週末には若者や家族連れで賑わう地区である。ソウル中心部からも近く、交通の便も良い。歴史や文化はもちろん、最新の韓国社会に触れることができる場所に存在する大学である。

5-2. 留学希望者へのアドバイス

近年、韓国の音楽やドラマなどが日本でも日常的に楽しまれており、韓国旅行も手軽にできるようになっている。韓国社会や韓国語に関して興味を抱く機会も多いのではないだろうか。一方で、朝鮮半島情勢や日韓の歴史問題などが日本でも頻繁に報道され、問題の複雑さと解決困難な情勢を見聞きすることも多い。まずは、こうした日本で接してきた「韓国像(イメージ)」を確かめるため、実際に韓国に留学して、積極的に韓国語で韓国の人々と交流して欲しい。そうすれば、留学前に自身が抱いていたイメージとは比べ物にならないほど、様々な韓国社会の実像、一言では言い表せない多様な面に触れることができると思う。同時に、韓国に住む人々がどのように日本社会を見ているのかも認識することができ、自分が自身の「社会」や「文化」に抱いてきた固定観念を振り返る機会にもなる。そうした経験を通して、日韓各々の社会で共通する部分と全く異なる部分について自分なりに考えを深め、自らの持っていた韓国社会への固定観念、さらには日本社会への固定観念を崩していく大事なきっかけとすることができると思う。日本では今でも、韓国を「近くて遠い国」と呼ぶことがあるが、実際に韓国に留学して、その「近さ」と「遠さ」を自分なりにぜひ実感してみたい。

5-3. 留学を終えて

韓国留学の主目的は、自身の専攻領域をより深く学びつつ、韓国の研究者と交流を深めることであった。周囲の人々の助力により様々な機会を得て、結果的には、自身の語学力を向上させて研究領域をさらに深く理解することができたと思っている。同時に、1年ではとてもわからない韓国朝鮮史の奥深さ、現代韓国社会の複雑な様相を改めて実感した。少しずつ理解が深まるほどに未知の部分や自分なりの疑問が大きくなり、留学前と比べて遥か韓国朝鮮への興味関心が湧いてきた。今までは知識でしか知らなかったことを実際に体験することにより、今までの日本での研究を見直す機会となった。達成感と同時に、自身の研究の不十分さも痛感したが、それもまた留学の貴重な経験だと感じている。今後の研究姿勢に必ずつながるものだと考えている。学習・研究の面だけではなく、留学中に築いた人間関係も本当に意義深いものだと感じている。大学院や研究の場を超えて、より人間的な部分で韓国の人々と親しく交流できたと自負しているが、これは留学生である私を温かく受け入れてくれた成均館大学校の学生・教官の方々の尽力に負う部分が多い。留学中に色々な助力を得たので、帰国した今、今度は自分が韓国の人々を少しでも助けられるように努力していきたいと考えている。韓国と日本に横たわる問題は根深いが、そうした問題を大上段に論じる前に、まずは今回知り合った人々とこれからも親密に交流し、相互に率直に議論して共感できる関係を大事にしていきたいと強く念じている。